

五高教授・夏目金之助、虚と実

服部, 英雄
くまもと文学・歴史館 : 館長

<https://hdl.handle.net/2324/1866686>

出版情報 : 熊本城. 104, pp.1-, 2016-11-22. 熊本城顕彰会
バージョン :
権利関係 :

掲載誌は『熊本城』復刊一〇四号（平成二十八年十一月二十二日）

五高教授・夏目金之助、虚と実

くまもと文学・歴史館長 服部英雄

震災直後、避難者が食事配給に列をなす熊本市役所に入り、まだ天井から電線がたれているような最上階にて、熊本城を見ました。クスの新緑がなんと鮮やかだったことか。崩壊箇所は見えてはいたが遠くて、ただただ、眼前の美しさに目がいて、まるで地震がなかったかのように錯覚しました。熊本城は被災してもなお美しかった。慶長時の熊本城築城は、十年以内の歳月にて、おおよそ完成したものと思います。技術者を養成しつつ、一丸となった修復にて、さほど遠くはない日に、復興されることを祈ります。

さて今年には五高教授夏目金之助、漱石の来熊一二〇年という記念年です。わがくまもと文学・歴史館でも企画展示「漱石と熊本」を開催しています。四年の滞在があっても、漱石が熊本城にふれた記述は少なく、明治二九年の句

午砲打ち 地城の上や 雲の峰

のみを知りました。熊本鎮台が置かれ、一般人は城域に入ることができず、おそらく宇土櫓も遠望できなかつた。漱石もさほどに関心を持てなかつたのでしょうか。熊本城内の午砲台は、復原された本丸御殿の南、月見櫓の位置を指し、かつては谷干城銅像があった一帯です。午砲（正午のドン）におどろき、城山を見あげたら、さらに高い入道雲一石垣のスカイラインに、雲が重なる。じしろ（地城）という言葉が『日本国語大辞典』では平地に築いた城の意味だとして、用例に漱石の『倫敦塔』を挙げます。

「塔と云ふは単に名前のみで実は幾多の櫓から成り立つ大きな地城である」

元本にルビはないが、ジシロと読むのでしょうか。他の用例はほとんどないので、漱石の造語のような気がします。漢語由来、あるいは英文翻訳でまれに使われることばだったのか。熊本城を見上げる漱石は、地からそびえる堅固な城と感じたのか、地域の中心となる城とみたものか。同年同時期の句に

行軍の ラッパの音や 雲の峰

明治二十九年、日清戦争に勝利した第十一旅団（威海衛旅団）を、新任の金之助は五高生徒を引率する「職員一同」として、出迎えました。六月七日、ラッパ・太鼓で行進してくる凱旋兵を洗馬・下馬両橋の間で迎え、通過は午後七時を過ぎていました（R4

8)。その翌日八日には池田駅（のちの上熊本駅）に漱石夫人となるべく中根鏡子が到着し、つづいて九日に結婚式（H）と、あわただしい日々でありました。夕刻の凱旋出迎えと「雲の峰」は時刻があわず、別の時のようです。

熊本城には行けなかった漱石も、わが文学・歴史館がある江津湖周辺にてしばしばボートを漕いでいます。赴任した年の冬には五高としての第一回・競漕大会が開催され、職員部に参加、赤色艇の二番漕手として力漕し、漱石艇は三挺身の大差をつけて、黄色艇に勝ちます（N）。『五高史』によって漕手となった教員を確認すると、一人をのぞいて新任教員ばかりでした。ただし漱石本人は学生時代にも漕艇経験があったようで、Black Club という名の黒い帽子を被ったクルーの一員だったといえます（「大田達人の回想」Z別巻およびH）。

このレースは何度も船を使う関係から六百メートル往復千二百メートルのコースで、折り返し地点の回転が勝負どころでしたが、赤黄両艇ともに内回りすべきところを外回りして、ともにコックス（舵手）の未熟さを露呈します。ボートは後ろを見ながら漕ぐから、余裕の距離を実感できました。ただしゴール直前に漱石の後ろを漕ぐ一番の大浦教授が腹切りします。船のスピードに負けて、オールの操作を誤り、手を離れたオールが腹に当たるので腹切りといえます。大浦教授は、もう勝負あったからイタヅラしただけだごまかしますが、艇速はかなり出ていました（R五四）。

勝利の爽快さは忘れることができないものだったらしく、二十年後の回想で、「運動は好きの方であったが、身体が虚弱であったため、規則正しい運動を努めてやったというわけではない。唯遊んだという方に過ぎないが、端艇競漕（ボートレース）などは先ず好んでやった方であろう」と語っています（「談話」、Z別巻三百二十三頁）。

金之助は端艇部長も引き受けました。明治三十年、日清戦争鹵獲艇二隻が「御譲与」され、佐世保滞在中の五高生二名に指図を与えるよう依頼状が出されます（『五高五十年史』）。『五高七十年史』『五高人物史』はかれらが「赤字を出し」「大いに飲食して」百円弱を使い込み、漱石がそれを穴埋め、同時に部長を辞めたと、書いています。金之助の当時の月給が百円で、熊本県の長者番付にその名前が載っています（「熊本県一円富豪家一覧表」熊本県立図書館蔵）。『五高人物史』がいう「薄給」は誤りです。

もともとの情報源は篠本二郎「五高時代の夏目君」（昭和十一年『漱石全集』月報）にあるようで、篠本の原稿は最初寺田寅彦のもとに送られてきたが、日の目を見ることなく、お蔵入り、かれの死語に見つけた小宮豊隆によって、紹介されたもので、もとは大正六年に書かれています。小宮は「少し面白く出来過ぎてゐる」としています（Z別巻）。直ちに印刷されるには問題となる内容もあったと思います。「某所に滞在」「正

当の仕払の外に「使い込んで仕舞」、はありそうなことで、当時の若者はついつい某所にあがり込み、そうした目にあいました。けれど佐世保に派遣の短艇（端艇）部生徒は『五高五十年史』『龍南会雑誌』では吉田久太郎・富田定寿（R八一）、『五高七十年史』では吉田、沖禎介と名前がちがっています。吉田はおそらく主将、ずっと端艇部に関わる人物で、明治三三年にも新艇発注で篠本二郎教授とともに長崎造船所に行っており、二度目も責任者になっています。富田は副将です。夏目は上記が原因で部長を辞めたとされているけれど、後任の岩田静夫講師は明治三十年部長、明治三一年再任（R・H）、翌年つぎの篠本に交替しています。当時は九月に新年度開始でした。

たしかに夏、佐世保から生徒が戻ってきた直後とはなるけれど、むしろ一年（二十九年度）の任期満了で、辞めたように思います。その夏は夏目教授は六月末から東京にいて、戻ったのは九月八日でした。

明治三十五年五月二十日、金之助は部長として校長の中川元や教頭の桜井房記、また上記の生徒吉田、富田らと連名で端艇部の資金充実の嘆願書を提出しました。各名士が資金を提供、九州大名家に由来する侯爵三家がそれぞれ百円を提供しています（R八一）。こうしたときに金之助も立場上、資金提供に応じたことでしょう。また問題を起こした生徒の処置を穏便にすますために、若干の援助をしたことはあったかもしれませんが、それぞれ時期も人もちがっていたような気がします。篠本は二十年ほど前のいくつかを混同して記憶し、尾ひれがついたのかもしれませんが。

（明治30年龍南会雑誌=R、九州日々新聞=N、熊本県公文類纂=K、濱崎曲汀「熊本時代の夏目漱石」=H、『漱石全集別巻』=Z）

——・
記述が錯綜したので、端艇部長辞任までの経緯を整理し直しておきます。

明治二九年九月頃龍南会付属短艇部長に就任（夏目漱石年譜・『五高と漱石』）

明治三〇年五月二〇日 端艇部長として主意書に名を連ね、寄付金受け付け窓口となる（主意書）。

明治三〇年六月二九日実父夏目直克死去により、七月八日上京・九月十日熊本に戻る（年譜）。

明治三〇年夏 端艇部拡張計画を受けて、日清戦争捕獲艇が、五高に払い下げられる。八月三日から四日、百貫港から江津湖へ回漕。これ以前に部員（主将・副将）を佐世保に派遣（R八一）

明治三〇年九月夏目教授が端艇部長を退任し岩田講師が部長となる（下記の再任記事か

ら推定)

明治三一年三月端艇部長、前部長の岩田講師が再任

よって熊本にいなかった金之助が、鹵獲船下付に関して事件に巻き込まれた可能性はほとんどなく、端艇部長を辞任するのも、任期がきたからであって、事件とは無関係であると考えます。漱石伝説の一つではないかと考えます。

*端艇部長の任期は九月と三月交代の半年で、ふつうは一年間継続したと推測します。

執筆当時、地震による被災のため、同僚篠本二郎教授による関連記事、昭和十年版全集・月報が見られませんでした。五高記念館に照会したところ、『七十年史』には二重の齟齬が見られ、正しいとはいえないとの回答をいただいています。